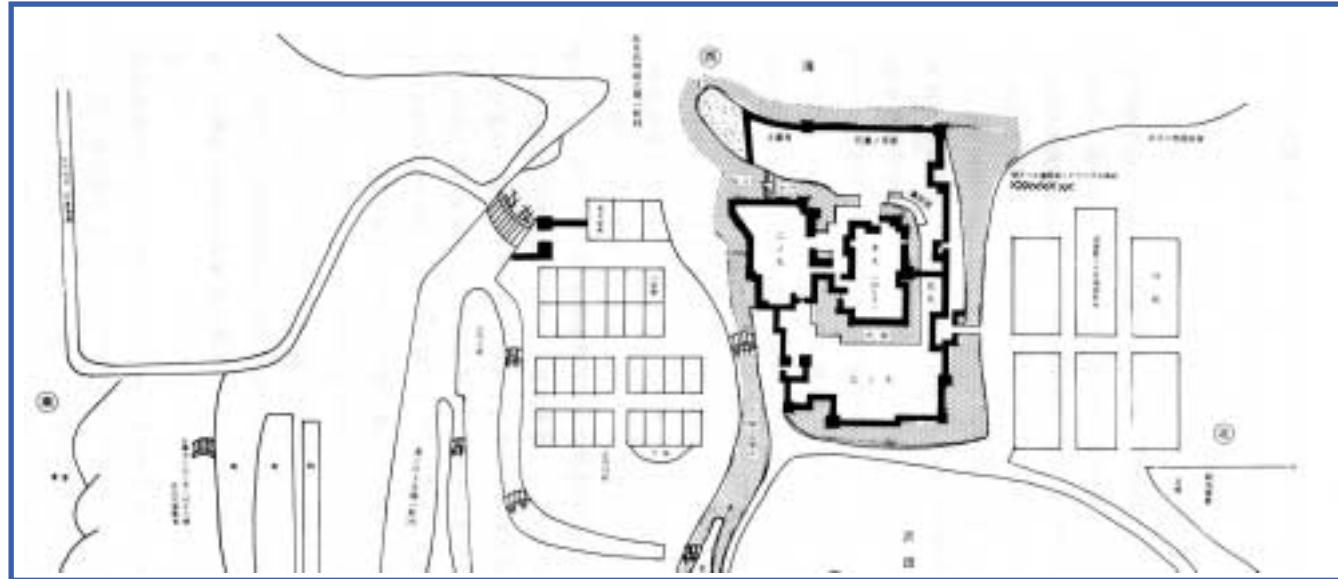


小浜酒井家史料から(2)

# 眺めは海原から



小浜城下(北は右；上が海側)

酒井忠勝は若狭小浜城を築くにあたり、国元の役人にいろいろな指示を出している。天守の外観については、「城踏」2号において紹介している。

本号では建物だけでなく、それが城下町全体でどのようなレイアウトの中に位置づけられるのかといった、城郭プランの一面を垣間見せてくれる史料を紹介してみたい。

酒井忠勝は寛永11年(1634)、武蔵川越から小浜に移封された。するとそれまで京極氏の居城であった小浜城の大改修を早速始めたい。史料を見るかぎり築城に対する彼の基本姿勢としては、既に述べたように一つに格好のよさが大事であった。

例えば、城の北側に西津という武家地があるが、その石垣改修については次のように記している。

「石垣の高サ八根石之外海より石つら(面)見へ申候分一間に築せ可申候。一間より高く候ハ西之丸の三年以前二つかせ申石垣二似寄候て悪敷可有之と存候」  
 (寛永15年5月23日)

海辺に広がる小浜城下では、防波堤の役割を担うための石垣も必要で、その修理に関する記事である。海から見えるのは高さ1間にしろというのである。この数値の

根拠ははっきりしないものの、既存石垣のようなものではだめだということだから、忠勝としては既存石垣の積み方等を問題視したのかもしれない。またこの史料で比較の対象とされる「西之丸の三年以前二つかせ申石垣」も、この時期に改修されることになったらしく「其元二ても石垣たんれん(鍛練)申候もの共二相談」して「石つらひかえ(控)何程之石」が適当なのか決めろという。実際には、既存石垣の石を混ぜて石垣の改修を行ったようである。

「西面二松多可有之と存候。同者松ヲ切候八ぬ様二縄はり可仕候。併石垣出入候て構申分八格別の事。兎角城より西津へ出候橋、并西之海表より見候て見事成やう二築せ可申候」

そしてこの史料から松の伐採を極力ひかえながら、城の西に広がる海上からの視線に注意を払っていることに気づくだろう。そういえば天守破風の白土塗りも遠方から目立つために施したように、小浜城は海からの視線を意識して建てられているといえそうだ。

「其元北国船多着候而下々にきあひ申候由令満足候」(寛永13年7月30日)

つまり、小浜港に入津する多くの北国廻船からの視線が、築城に際して強く意識されているということになる。なるほど、享和3年(1803)の「小浜町絵図屏風」で小浜湾上空からの視点で小浜城を構図のほぼ中心部に据えて描いているのは、船で賑わう町の様子を描くと同時に、小浜城が最も「見事成る」ように見えることを考えていたのであろう。

そしてこれは何も城だけにかぎらない。

「城之方かうが崎之方并海手より見申候て、町なミ之能様二可申付候」  
 (寛永17年カ 6月朔日)

町並みについても注意しているのだ。近世城郭では城と城下町は一体であるから、これは当然のことともいえる。城だけ格好がよくても、城下町がみすぼらしければ意味はない。

さて、そうして小浜城は完成に向けて工事は進んでいく。当然、多くの資材が必要になり、国元に材料に適した材木があれば山から伐り出すことになる。

西の丸海側石垣・波留石積

「表むきへ少も見へ候所者無用二可仕候」  
 (寛永12年8月24日)

人目につく山では、木を伐らせないのだ。小浜の殿様、山の景色も軽視していない。



<参考・図版出典>

小浜城跡発掘調査団編『若狭小浜城』1984

